

草津川改修事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報 3

— 御倉・北萱地区 —



1988

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会



草津川改修事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報 3

— 御倉・北萱地区 —

1988

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

序

近年県内の各所において河川の統合化が琵琶湖総合開発の一環として計画され進められています。草津川改修工事もそのような改修計画の一つであります。草津川改修工事に先立って実施してきました埋蔵文化財調査も昭和56年度より実施し本年度で7年目を迎えることになりました。

先人の残した遺産を保護し、後世に引き継ぐという文化財保護の理念のもとに発掘調査を実施してまいりましたが、今後とも草津川改修工事の早期実現に向けて調査を鋭意進めていく所でありたいと願っています。

本書はこれまでの調査のうち、昭和62年度に実施した御倉・北萱地区の事前発掘調査について概要報告としてまとめたものであります。御高覧の上今後の埋蔵文化財保護の御理解に役立てて戴ければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力を頂きました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く感謝の意を現わします。

昭和63年3月

滋賀県教育委員会
教育長 飯田 志農夫

例 言

1. 本書は県土木部の実施する草津川改修事業に伴う、草津市矢橋町・御倉町・橋岡町所在、草津川関連遺跡御倉地区の発掘調査概要報告書で、昭和62年度に発掘調査し、当年度に整理したものである。
2. 本調査は県土木部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 発掘調査にあたっては草津市教育委員会の多大な協力を得た。
4. 本書で使用した方位は磁針方位に基き、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
5. 本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部 正
文化財保護課長補佐	出口宇一郎
埋蔵文化財係長	林 博通
埋蔵文化財係技師	木戸 雅寿
管 理 係 主 事	山 出 隆

財団法人 滋賀県文化財保護協会

理 事 長	吉崎 貞一
事 務 局 長	中島 良一
埋蔵文化財課長	近藤 滋
埋蔵文化財調査三係長	兼康 保明
埋蔵文化財調査三係技師	三宅 弘
総 務 課 長	山下 弘
総務課主任主事	松本 暢弘
総務課事務編託	柴田 弘子

6. 本書の執筆・編集は、調査担当者、調査三係技師三宅 弘が行い、山本晃子、大村 猛、山崎由紀子が補佐した。
7. 尚、第2章に付論として、昭和61年度複遺跡発掘調査概要を併載する。執筆は葛野 泰樹が行った。
8. 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会が保管している。

目 次

第1章 御倉遺跡

I 位置と環境	1
II 調査	
1. 調査に至る経過	3
2. 調査経緯	3
III 遺 構	
1. D地区	3
2. E地区	5
3. F地区	6
4. G地区	6
5. 小 結	7
IV 遺 物	
1. 土 器	8
2. その他	11
3. 小 結	12
V まとめ	12

第2章 襖 遺 跡

1. はじめに	15
2. 調査概要	15
3. まとめ	15

挿 図 目 次

第1図	御倉遺跡と周辺の遺跡	2
第2図	SD3検出状況(東より)	4
第3図	SD37土器出土状況	5
第4図	石籬・土鍾	10
第5図	横遺跡出土遺物実測図	15

図 版 目 次

御倉遺跡

図版 1 (上) D地区調査前風景(東より)	図版 14	71~78SK35出土土器 80-81SK36出土土器 83SK40出土土器 85~87G包含層出土土器 89SD4出土土器
(下) G地区調査前風景(西より)	図版 15	トレンチ配設図
図版 2 (上) D地区全景(東より)	図版 16	D地区遺構実測図
(下) D地区SB1検出状況(東より)	図版 17	E地区遺構実測図
図版 3 (上) D地区SX1検出状況(東より)	図版 18	F地区遺構実測図
(下) D地区SX2検出状況(南より)	図版 19	G地区遺構実測図
図版 4 (上) D地区SX4検出状況(南より)	図版 20 (上)	D地区SX3土器出土状況図
(下) D地区SX5検出状況(南より)	(下)	E V地区SD35土器出土状況図
図版 5 (上) E I地区全景(東より)	図版 21	Dトレンチ出土土器実測図 1SB1 2SD1 3~5SD3 6~29SD4 30SD10 31・32SX2 33SX3 34SX4
(下) E II地区畦と溝断面	図版 22	Eトレンチ出土土器実測図 35SK10 36SD27 37・38SK21 39包含層 40・41SD28 42~46SD37
図版 6 (上) E II地区全景(西より)	図版 23	Gトレンチ出土土器実測図 47・48SD38 49~52SD40 53・54SD46 55~64SK35
(下) E III地区全景(西より)	図版 24 (上)	Gトレンチ出土土器実測図 65~79SK35 80~82SK36 83SK40 84SK41 85~87包含層
図版 7 (上) E IV地区全景(東より)	(下)	石籬、土鍾実測図 88SD31 89-90・92SD4 91SD4 91SD28 93~95SK10 96SD15
(下) E V地区全景(東より)		
図版 8 (上) F地区全景(東より)		
(下) G地区全景(西より)		
図版 9 (上) D地区SX3土器出土状況		
(下) E I地区SK10土器出土状況		
図版 10	6~28SD4出土土器	
図版 11	27D4出土土器 32X2出土土器 3 33SX3出土土器 34SX4出土土器 36SK10出土土器 39E III包含層出土土器 40SD28出土土器	
図版 12	43~46SD37出土土器 47-48SD38出土土器 52SD40出土土器 53SD46出土土器 55-56SK35出土土器	
図版 13	57~69SK35出土土器	
	横遺跡	
	図版 25 (上) 発掘調査風景	
	(下) №19+60~№20トレンチ(西より)	
	図版 26 (上) 柱穴検出状況№19+90付近	
	(下) SD5~7検出状況(南より)	
	図版 27 (上) 出土遺物	
	(下) 出土遺物	
	図版 28 調査地周辺地形図 遺構実測図および土層柱状図	

第1章 御倉遺跡

I. 位置と環境

御倉遺跡は草津市御倉町・矢橋町・橋岡町にわたって所在する。この地は浜街道（県道彦根・近江八幡－大津線）と御倉・橋岡の両集落に囲まれた所にあり、遺跡の範囲内には山田村大字御倉小字六石・水込、老上村大字矢橋小字位野、同村大字橋岡小字任司田などの地名が窺える。子守神社はそのやや北寄りに含まれ、両端を北川が西へ蛇行して流れている。

周辺の地形からは、東から整然と続いてきた条里制地割やそれに模倣されて流れる北川が、当遺跡付近で急に乱れを生じさせているのがわかる。北川の流れは古より度々変化していたであろうことは、御倉と矢橋の集落の間で地割が大きく乱れていることから窺え、残された微高地上に当時の人々が生活していたものと思われる。古墳時代と平安時代の遺跡が散布している狭間遺跡もそのような微高地上に営まれたものであろう。

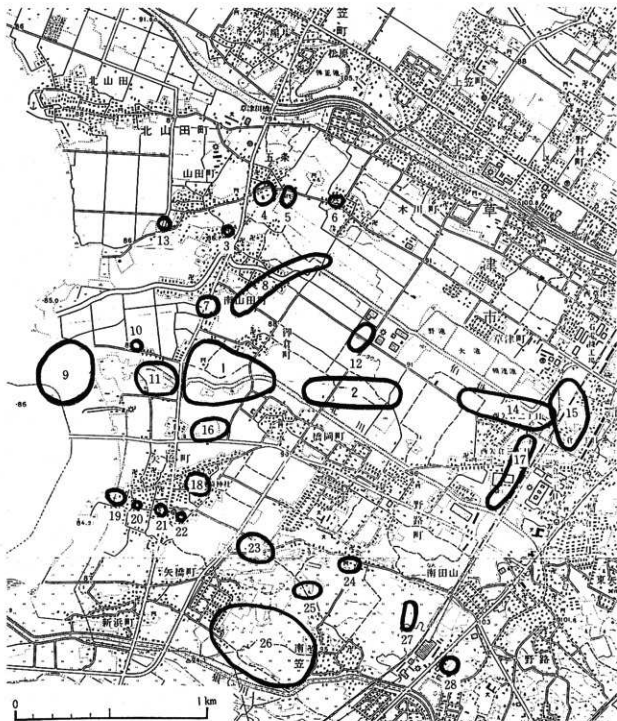
明治25年の地形図によれば、現在の浜街道にはぼ重なるように里道が通じていた。この里道以西には水路が多く陥られ、山田の集落付近はかつて内湖が存在したと考えられている^①。『近江栗太郎志』によれば、寛正・文明の間（1460～87年）に蓮如上人が堂を建立したとの言い伝えがある蓮如堂遺跡は、渡船場でもあったと記載される^②。また、蓮如堂は明治29年の近江大洪水で流失したとされているが、上記の地形図には流失直前の蓮如堂の位置が窺える。

浜街道以西の地は、地図からは多くの水路が延びた湿地状を呈していたであろうと考えられる。北宮遺跡からは北川の旧水路と思われる旧河迺が、古墳時代と鎌倉時代の2時期に分かれて検出された^③。この旧河迺の上層には砂とシルトが交互に約2mにわたって堆積し、北川の暴れぶりを物語っている。また同遺跡では、北川右岸の浜街道から約100m離れたA地区で平安時代から鎌倉時代の礫・溝等が検出されている。他地区では旧河迺以外の遺構は検出されておらず、昭和59年度以降の湖岸沿いで行われた調査においても当地が淀んだ湿地状を呈していたことが証明されている^④。

当御倉遺跡は、昭和57年度に滋賀県教育委員会が草津川新放水路法線内で実施した発掘調査を皮切りに、数々の調査が行われてきた^⑤。それらによると、5世紀から8世紀の集落跡であると確認されている。また、草津市教育委員会による昭和60年度から現在にわたって続けられている調査は、御倉遺跡の中心部分を東西に横切る形で行われた。昭和60年度の調査では、西から4、1、2、3の順にトレンチが設定され第1トレンチ中央から第3トレンチ中央にかけてと第4トレンチの西半分は湿地状を呈するとされている^⑥。その部分は北川が大きく南へ彎曲し、地形的にも川跡の様子が窺える。第4トレンチと第1トレンチの間には子守神社が鎮座し、この辺りが微高地であろうと思われる。翌年の調査でも、古墳時代と平安時代の独立柱建物などが検出され、そのことを証明している^⑦。

御倉遺跡では、現在まで古墳時代前期から中期にかけての時期と、奈良時代、平安時代、江戸時代の各時期の遺構が確認されている^⑧。また北宮遺跡からは縄文時代前期から室町時代に至る遺物が認められることより、北宮遺跡の周辺にも各時期の遺構が存在するものと思われる。

草津市南西部は、縄文時代は矢橋湖底遺跡で中期の土器が発見され、弥生時代においても同遺跡で後期から古墳時代初頭にかけての土器が^⑨、横遺跡でも分布調査により少し発見された程度である^⑩。古墳時代に入ると北山田町に五条古墳群、南山田町に大宮若松神社古墳・南田山古墳群、矢橋町に巖崎神社古墳群、野路町に南笠古墳群が築造される。これらは大宮若松神社古墳の5世紀後半を最古とし、概ね6世紀から7世紀のものが多い。古墳



第1図 御倉遺跡と周辺の遺跡

1. 御倉遺跡 2. 襖遺跡 3. 大宮若松神社古墳 4. 山田城跡 5. 五条古墳群 6. 金峰山寺遺跡
7. 山田港遺跡 8. 南山田古墳群 9. 矢橋湖底遺跡 10. 蓮如堂遺跡 11. 北萱遺跡 12. 墓/町遺跡
13. 里南遺跡 14. 谷遺跡 15. 中畑遺跡 16. 狭間遺跡 17. 矢倉古墳群 18. 鞆崎神社古墳群
19. 矢橋港遺跡 20. 矢橋城跡 21. 石津寺庵寺遺跡 22. 大善寺遺跡 23. 中ノ沢遺跡 24. 南田山古墳群
25. 南笠古墳群 26. 西海道遺跡 27. 辨差遺跡 28. 広野遺跡

時代前期の古墳はこの周辺では発見されていないが、北萱遺跡や御倉遺跡で検出された同時期の遺構や遺物の存在、狭間遺跡の遺物など、いずれ周辺に古墳時代前期の集落が発見されるものと思われる。

Ⅱ. 調 査

1. 調査に至る経過

草津川改修事業に伴う発掘調査は、昭和59年度に始められ、今年度で4年目を迎える。新河川流域内での遺跡は、J R東海道本線以西に限れば5遺跡確認されている¹⁹⁾。昭和59年度から61年度にかけては浜街道以西の北堂遺跡が調査され、発掘調査概報が刊行されている²⁰⁾。今年度は浜街道の東に隣接している御倉遺跡について発掘調査が行われることになった。

御倉遺跡の発掘調査に際しては、河川計画範囲のセンターラインより右岸（北側）部分についての暫定水路掘削部分に関してまず調査を行なうことになっている。それに加えて、両岸に設けられる堤防敷の外側に側道と水路が造られるため、その部分の調査も行われる。側道および側溝部分については昭和60年度に草津市教育委員会によって№6+40～№10+40までが調査されている²¹⁾。また、本川部分についても同じく草津市教育委員会によって昭和61年度から発掘調査が行われている²²⁾。

今回は、左岸部分の№6+40～№8+20までの側道および側溝部分6m×150m（900㎡）と本川部分の№9+50～№11+40の40m×190m（7600㎡）のうち、現河川の北川とその自然堤防部分等を除く3,400㎡の、合計4,300㎡について発掘調査が行われた。

2. 調査経過

便宜上、側道および側溝部分をE地区とし、さらに水路や畦畔等により分断されたトレンチを西（下流）から順にE I～E Vとした。また、本川部分は、北川右岸の№9+50～№10+20をD地区、左岸で道路より西に当たる№10～№10+60の部分をF地区、道路より東の№10+70～№11+40の部分をG地区とした。

トレンチの掘削に際しては、0.4m級バック・ホーを用い、F地区・G地区に関しては北川の堤防に沿う形で細長くトレンチを設け、遺構の認められた部分において大きく掘り広げることとした。

各地区ともに遺構面は比較的浅く、表上下30cm～50cmで検出された。遺物包含層はほとんど認められなかった。但し、F地区は遺構が認められず、G地区については約1m近く掘り下げた所で遺構が検出されている。各地区とも、もと水田であったため、浅い所では耕作土と床土をめぐった段階、深い所でも床土との間に砂層や砂礫層が加わっただけで遺構面に至っている。

D地区は約950㎡、E地区は約500㎡、F地区は約300㎡、G地区は約500㎡のトレンチを掘削した。

現地での調査期間は昭和62年4月1日～9月24日であった。

Ⅲ. 遺 構

各地区から多くの遺構が検出されたが、ここでは明確なもののみを記述した。

1. D 地区

当地区からは、独立柱建物1棟、旧河道1条、溝14条、土塙9基、方形周溝蓋5基が検出されている。

独立柱建物

SB1 調査地区の西端で検出された。西半分は調査地区外であるが、草津市教育委員会の調査により²³⁾、東西4間（4.1m）以上×南北3間（6.8m）の東西棟の柱建物であることが判明している。柱穴は直径0.4m、

深さ0.2m～0.6mの円形を呈し、柱間は2.0m～2.2mである。方位はN86°Wであった。東辺北から2つ目の柱穴より平安時代中頃の土師皿が1点出土している。

旧河道

調査地区の南約3分の1を東から西に向って流れる形状を呈する。そのほとんどが調査地区外のため、北岸のみを検出した。長さ45m以上、幅13.3m以上、深さ0.6m以上である。埋土上層より中・近世以降の陶磁器類が若干出土した。

溝

SD1 東端で検出された。東西方向にまっすぐ流れる形状を呈し、長さ2.1m、幅0.2m、深さ0.1mを測る。

SD2 SD1の南に並行した形で検出された。直線で長さ9.0m、幅0.8m～1.3m、深さ0.3mを測る。

SD3 トレンチの東端から西端に向ってやや蛇行して流れる形状を呈する。長さ40.8m、幅1.1m、深さ0.6mを測る。上層から平安時代の黒色土器、下層からは土師器片が出土している。

SD4 トレンチほぼ中央を北から南に向ってまっすぐ流れる形状を呈し、SD3に切られている。断面観察より3時期に分けられる。SD4-1は長さ1.2m、幅1.9m～2.2m、深さ0.5m、SD4-2は長さ1.2m、幅0.5m～0.7m、深さ0.4m、SD4-3は長さ1.2m、幅0.5m～0.7m、深さ0.4mを測る。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土している。

SD10 SX2・SX4・SD3などと重複しながら、それらを切り込んでトレンチ西端を南北方向にまっすぐ流れる形状を呈する。北端は調査地区外、南端は旧河道に流れ込んでいる。長さ22.2m以上、幅2.5m～4.8m、深さ0.2mを測り、南半分は長さ12.7m、幅1.0m～2.2m、深さ0.1m～0.3mの落ち込みがみられる。

SD14 SD10・SD3などと重複して検出された。旧河道に切られているため東南部分は不明であるが、平面形は隅丸方形に巡ると思われる。北西辺の方位はN24°Eで、長さ14.0m、北東辺は長さ7.7m、どちらも幅は0.4m、深さは0.2m～0.4mを測る。

土坑

SK1 SD2の東延長線上にある。規模は1.4m×0.6mの楕円形を呈し、深さは0.2m～0.3mを測る。

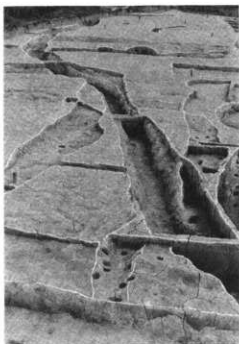
SK2 SD4の西5mで検出された。南端を旧河道に切られた楕円形を呈する。規模は1.4m以上×0.7m、深さ0.1m～0.3mを測る。

SK8 SD10の南端西辺に重複して検出された。SD10に切られており、1.6m×1.1m、深さ0.1mを測る。

SK9 SK8の西にあり、平面形は東西に長い楕円形を呈する。規模は2.1m×0.6m、東端で段を有し深さは0.1m～0.2mを測る。

方形周溝墓

SX1 トレンチ東端に位置する。南西コーナー付近のみ検出され、方位はN14°Wを呈する。周溝部の西辺は長さ3.5m、南辺は長さ3.1mで、ともに幅1.0m、深さ0.2mを測る。方台部には主体部の痕跡は認められな



第2図 SD3検出状況(東より)



第3図 SD37土器出土状況

かった。遺物は検出できなかった。

SX2 SD4とSD10に狭まれ、SD3と南東コーナーを重複している。北辺は調査地区外のため不明であるが、方位は西辺でN5°Wであった。周溝部の規模は、南辺で長さ10.2m、幅0.7m～1.3m、深さ0.1m、西辺で長さ10.9m以上、幅1.2m、深さ0.1mを測る。方台部には主体部の痕跡は認められなかった。遺物は弥生時代後期の甕の底部と古墳時代後期の須恵器坏蓋が出土している。

SX3 トレンチ北コーナーで検出された。

南東コーナーのみの検出で、N13°Wの方位を呈している。周溝部の東辺は長さ2.2m以上、南辺は長さ1.1m以上を測り、幅は0.7m～0.9m、深さは0.2mを測る。遺物は古墳時代初頭の壺が出土している。

SX4 SX3の南で検出され、方位はN14°WとSX3と同方向に並んでいる。西半分は調査地区外であり、東辺は長さ8.0m、幅1.1m、深さ0.2m、南辺は長さ6.8m以上、幅1.0m、深さ0.3mを測る。方台部には主体部の痕跡は認められなかった。遺物は弥生時代後期～古墳時代初頭の土器底部が出土している。

SX5 SX2の南で検出され、方位はN7°Wを示しSX2と同じ方向に並ぶ。東辺と南辺は旧河道などにより削平を受けている。また、北辺もSD3、SD14などと重複しているが、長さ7.6m以上、幅0.8m～1.0m、深さ0.2mを測る。西辺は南北端を削平されているものの、長さ6.3m以上、幅0.6m～0.8m、深さ0.3mを測る。方台部には他の遺構が密集しており、主体部等は発見できなかった。遺物は全く検出されなかった。

2. E地区

当地区からは掘立柱建物3棟、溝23条、土壇26基が検出されている。便宜上EⅠ～EⅤの地区に分けて述べていく。

a EⅠ地区

土壇

SK10 当地区の東端に集中して検出された遺構群の中にある。やや下ぶくれの楕円形を呈し、規模は0.9m×0.5m、深さは0.1mを測る。

SK11 SK10の東に接して掘り込まれている。北半分は調査地区外であるが、やや形のくずれた楕円形を呈する。規模は1.9m×0.9m、深さは0.8mを測る。中央に0.5m×0.5m、深さ0.3mのピットが1つある。

b EⅡ地区

掘立柱建物

SB2 トレンチ中央に3棟集中して検出された1群のうち、南西に位置する。3間(4.7m)以上×1間(2.0m)以上の東西棟建物で、方位はN55°Wを測る。1.6m～1.7mの柱間をもち、柱穴は直径0.3m～0.5mの円形を呈し、深さは0.1m～0.4mを測る。

SB3 SB2の真北に位置する。2間(3.8m)以上×1間(2.3m)以上の東西棟建物で、N53°Wの方位をもち、SB2と並行している。柱間は1.9m～2.1mで、0.4m～0.8mの楕円形の柱穴は0.1m～0.3mの

深さを測る。

SB4 SB3の真東で検出された。トレンチに平行な東西棟建物で、方位はN84°Wである。南辺のみの検出で、3間(4.5m)分見つかっている。柱間は1.4m～1.6mで、柱穴は0.2m～0.3m、深さは0.1mを測る。

溝

SD15・16 トレンチ西端で平行して検出された。トレンチとほぼ直交しているため全容は詳かではないが、どちらも長さ3.0m以上、幅2.0m、深さ0.3mを測る。方位はN30°Eで条田方位とはほぼ一致する。

SD20 トレンチ東端で検出された。長さ3.2m以上、幅1.0m、深さ0.1mを測る。

上埧

SK13 SK12の南にあり、北半分が検出されている。1.2m以上×1.0m、深さ1.3mを測る。

SK14 SD19の北端にあり、それと重複している。平面正方形を呈し、1.3m×1.5m、深さ0.1mを測る。

c EⅢ地区

溝

SD26 トレンチ中央で検出された。ほぼ東西に流れる形状を呈し、長さ2.8m以上、幅3.8m、深さ0.1m～0.4mを測る。

SD27 東端に位置して南北に流れる形状で、北端はEⅣトレンチへつづいている。長さ2.9m、幅0.8m、深さ0.1mを測る。

土埧

SK21 SK20の南に重複している。南半分は調査地区外であり、半円形を呈する。0.6m以上×0.6m、深さ0.1mを測る。

d EⅣ地区

溝

SD28 トレンチ西端で検出された。ほぼ南北に流れる形状を呈し、長さ4.0m以上、幅2.5m～5.0m、深さ0.1～0.3mを測る。

SD31・32 トレンチ中央を横切って北東～南西に向って流れる形状を呈する。SD31は長さ3.4m以上、幅1.1m、深さ0.4m、SD32は長さ3.1m以上、幅0.3m、深さ0.2mで、SD31とSD32は接している。

SD35 SD32の東にあり、北半分はSK42に切られているが、底面に痕跡が残る。弧状に彎曲した形状を呈し、長さ3.8m以上、幅0.4m、深さ0.1mを測る。

SD36 トレンチ東端を北東～南西に流れる形状を呈する。長さ3.2m以上、幅1.8m、深さ0.4mを測る。

e EⅤ地区

溝

SD37 トレンチほぼ中央を直交して横切る形状を呈する。長さ2.3m以上、幅0.9m、深さ0.3mを測る。遺物は、上層より弥生時代後期の土器が完形に近い形で数点出土している。

3. F地区

トレンチ内は砂層と微細粘土(シルト)層の交互に堆積したもので、明確な遺物は何も発見できなかった。

4. G地区

当地区からは樹立柱建物1棟、溝9条、土埧7基が検出されている。なお当地区の北3分の1に旧河道が検出

されている。

掘立柱建物

SB5 トレンチ西北端で検出された。2間以上(4.2m)×1間以上(2.2m)の東西棟建物と考えられる。柱間は2.0m～2.2mを測る。柱穴は隅丸方形を呈し、1辺0.6m、深さは0.3mを測る。方位はN22°Eであった。

旧河道

北川の氾濫跡と考えられる旧河道がトレンチの北部分を約3分の1程覆っている。長さは30m以上、幅10m以上、深さは0.8m以上を測る。

溝

SD38 トレンチ西南部で検出され、西端は調査地区外である。旧河道と平行する方向に流れる形状を呈し、長さ6.1m以上、幅0.5m、深さ0.2mを測る。

SD40 旧河道より南の部分を大きく半円形に巡る形で検出されている。両端は調査地区外であるが、円形に巡ると考えると直径1.9m、溝の長さ28.5m以上、幅1.7m～3.9m、深さ0.2m～0.4mを測る。溝が巡る内部は断面観察により約50cm位高まりが認められる。遺物は平安時代の土師器・須恵器が多量に出土している。

SD41 SD40の溝が巡る内部に検出されている。SD40と逆向きのコの字形を呈し、南辺は長さ14.0m、幅2.2m～3.8m、深さ0.2m、東辺は4.8m、西辺は4.7mの長さが残っている。

SD46 SD40の東にあり、平面くの字に折れ曲がる。長さ4.2m、幅0.4m～0.9m、深さ0.3mを測る。

土壌

SK35 SD40の北に重複して検出された。北西～南東方向に長い楕円形を呈し、規模は長径2.2m、短径0.9m、深さは0.4mを測る。遺物は平安時代前半頃の土師器が多量に出土した。

SK36 SD40の北に接して掘り込まれている。ほぼ円形であり、直径0.8m、深さは0.1mを測る。

SK37 SD38とSK35の間に位置し、SD40に接している。SK35と同方向に長い楕円形を呈し、長径1.2m、短径0.6m、深さ0.3mを測る。

SK39・40 SD40と41の間で検出された。ともに長方形を呈し、SK39は1.9m以上×1.3m以上、深さ0.1m、SK40は1.8m以上×1.4m以上、深さ0.2mを測る。

SK41 SD46の北端に重複して検出された。南北に長い楕円形を呈し、長径2.8m、短径1.6m、深さ0.1mを測る。

5. 小 結

当遺跡からは、掘立柱建物5棟、溝46条、土壌41基、方形周溝墓5基、旧河道2条が検出されている。これらのうち、旧河道はF地区の範囲内を含めて北川の旧流路であることは言うまでもない。G地区上層から中近世の遺物が若干認められたのみで、時期が決定し得なかった。また、遺構面下2～3mまでトレンチを掘り下げたが、川底を確認できなかった。

SB1は東西4間、南北3間の東西棟建物であるが、西約半分は草津市教育委員会によって調査されている^⑧。東西の北から2つ目の柱穴から10世紀代の土師皿を出土している。SB2～5も平安時代の遺物が柱穴より出土している。SB2・SB4は同方位であるが、接近しており時期にずれが見られる。従って、少なくとも建物は3時期に分けられる。これらと同時期の遺構はSD18、27などトレンチに直交する溝が多い。SB3とこれらの溝は、ほぼ同じ方位を示している。特にSD18はSB3の東に接近して掘られ、SB3と強く関連するものと思

われる。

E地区のトレンチに直交する溝に対して、やや東へ振ったN30°E前後の方位を持つ溝がある。SD15・16・17・19・20・31・32・36などで、SB2・4と比較的近い方位を示している。また、SD15・16の間には畦状の高まりが認められる。これらの溝は、条里の地割に近い方位を持っている。

方形周溝墓は5基検出されている。SX1・5では遺物が認められなかったが、SX2は弥生時代後期、SX3は古墳時代前期、SX4は弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土している。5基ともほぼ同方位を示しており、SX2とSX5の西辺、SX3とSX4の東辺が一直線上に並ぶことから、相互に関連して造られたものと思われる。また、SD4は弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が、3時期に分かれて堆積していた。N2°Wと方形周溝墓とはほぼ同じ方位を示していることから、SX1とその他の方形周溝墓を囲む溝と考えられる。また、SD2は方位がN89°Wを示し、方形周溝墓の可能性も考えられる。

SD3は10世紀代の遺物を上層から出し、SB1との関連性が考えられる。この溝は方形周溝墓の各周溝のコーナー部分と重複している。

G地区には、平安時代の遺構が多く検出された。いずれも9世紀～10世紀頃のもので、SB5とほぼ同時期のものであろう。

SD40はトレンチ中央を半円形に巡っている。トレンチ南端が調査地区外のため、その全容は窺い知れない。半円形の台状部分にはSD41など同時期の遺構が掘り込まれているが、何等かの施設らしきものは認められない。

IV. 遺物

1. 土器

各地区の遺構および包舎から多量の遺物が出土している。土器は弥生時代～江戸時代のものを含み、他に石器や土師が数点出土している。

遺物は、便宜上各地区ごとに分け、遺構編で述べた順序に従って記述することにした。

1. D地区出土土器

掘立柱建物・溝・土壇・方形周溝墓から、多様な遺物が出土している。

掘立柱建物

SB1 北東隅から南へ向って2つ目の柱穴から平安時代中頃の土師皿(1)が出土している。この字状口縁をもつもので、復元径10.3cm、器高0.7cmを測る。

溝

SD1 上層より古墳時代前期の土師器(2)が1点出土した。

SD3 平安時代の土器が上層から出土している。3は土師器の椀Bで、平らな底部に断面三角形の高合をもつ。4は黒色土器A類の碗で、内面底部にヘラミガキの痕跡が残る。5は灰釉の皿Bで、内外面ともに淡緑褐色の釉がかけられる。いずれも10世紀代のものであろう。

SD4-1 弥生時代後期～庄内式併行期の土器が出土した。6は細頸の壺で口径6.0cmを測る。全体的に摩滅している。7は壺、12は甕の底部である。8・9は近江型甕の口縁部で、8は口径16.4cm、9は口径15.0cmを測る。8は頸部下半に刺突列点文が施されている。10・11は有孔鉢である。11は口径16.0cm、器高8.2cmを測る。

13は高環の脚部で底径14.8cm、円形のスカシ孔を三方に穿つ。14は器台で、高環形を呈する。スカシ孔は円形で三方に認められる。

SD4-2 庄内式併行期～布留式併行期の土器が出土している。15～20は甕の口縁部の破片である。15は大きく外反した口縁部が、端部付近で受け口状を呈するもので、口径13.4cmを測る。16～20は近江型の甕で、口径は10.2cm～14.0cmのものである。21は器台の脚部で底径11.4cmを測る。四方に円形スカシ孔が穿たれる。

SD4-3 弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土した。22は口縁部がくの字状に外反する甕で端部は外傾する平面を持つ。体部外面には縦方向にハケ目を施している。口径11.0cmを測る。23は近江型の甕、24は甕の底部である。23は口径12.6cmを測る。25は鉢の体部下半と思われ、内面にヘラミガキが認められる。26は有孔鉢の底部であろう。27・28は高環の環部底以下のもので、27は底径11.2cmを測りスカシ孔は見られない。28は底径14.4cmを測り、三方に円形スカシ孔を穿っている。29は二重口縁の壺かと思われるが小片なので定かではない。口径は24.0cmを測る。

SD10 平安時代中頃の土師器碗(30)が出土している。底径は6.6cmを測る。

方形周溝墓

SX2 弥生時代後期と思われる壺か甕の底部片(31)が出土した。32は古墳時代後期の須恵器坏蓋である。口径8.8cm、器高3.6cmを測り、天井部外面の3分の1はヘラ切り未調整である。32は上層からの出土であるが、後世の混入であろうか。

SX3 コーナー部分から二重口縁壺(33)が出土した。体部下3分の1と口縁部を欠失している。ほぼ球形の体部をもち、くの字状に外反した口縁部はさらに大きく外反する。口縁部外面の中位に稜線を形成している。調整は体部の内面下・中位は斜め、上位は横のヘラケズリ、外面は縦方向の後斜めのハケ目を施す。庄内式併行期の土器であろう。

SX4 下層より弥生時代後期～庄内式併行期頃と思われる壺か甕の底部(34)が出土した。

2. EⅠ地区出土土器

土壌

SK10 弥生時代後期の甕が1点(35)出土した。倒卵型の体底部に小さい上げ底が付く。口縁部はくの字に外反し、端部はやや尖り気味に終わる。全体的に薄手である。

3. EⅢ地区出土土器

溝

SD27 口径15.8cmを測る近江型甕の体部上半以上の破片(36)が出土した。弥生時代後期～庄内式併行期のものであろう。

土壌

SK21 弥生時代後期の土器が2点出土している。37は壺か甕の底部である。38は器台の受け部の破片で、口径19.8cmを測る。端部を肥厚させ、外面に3条の沈線を巡らせる。内外面はヘラミガキ調整が施される。

包含層

39は有孔鉢の底部片である。穿孔は底部中央をややずれて行われている。

4. EⅣ地区出土土器

溝

SD28 6世紀後半頃の須恵器の横瓶(40)と坏身(41)が出土している。40は口縁部が完存し、体部以下も2分の1以上残している。俵形の体部から、八の字状に開く口縁部がのびる。端部は上下につまみ出している。体部に平行叩き後カキ目調整を施している。41は口径13.0cmを測るもので、体部以下を欠失している。

5. EV地区出土土器

溝

SD37 弥生時代後期の土器が上層より集中して出土している。42・43は小型甕である。42は底部片であるが、43はほぼ完存している。平らで厚みのある底部から卵形の体部がつづく。口縁部は短かく外反し、端部は丸く収める。片口を形成し、口径9.2cm、器高11.9cmを測る。摩滅が著しく、調整は不明である。44は壺もしくは甕の底部片である。45・46は器台で、裾部以下を欠失している。円筒状の脚柱部に大きく開く受け部をもつもので、端部は下方に肥厚させる。脚柱部下端に3方の円形スカシ孔を穿っている。45は受け部端に竹管円形浮文を3個1組で6方向に貼り付ける。外面全体と受け部内面に縦方向のヘラミガキ、他はヨコナデを施す。46は受け部端に2条の凹線を巡らせる。摩滅が著しく調整は不明である。

6. G地区出土土器

溝

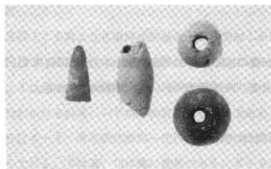
SD38 10世紀頃の土師器坏(48)と庄内式併行期の短頸壺(47)が出土している。47は底部を欠失するものの、球形の体部から短かく垂直にのびる口縁部へつづく。端部は丸く収めている。全面をナデている。48は平らな底部からやや内彎気味にのびる口縁部を有し、端部は丸く収めている。外底面を除きヨコナデが施されている。

SD40 9世紀末～10世紀初頃の土器が出土している。図示し得たものは純て土師器皿であるが、須恵器片なども若干出土している。口径は14.6cm～18.8cmを測る。49・50は底部を欠失しているが、他は平底ですべて外反する口縁部を持つ。端部は丸く収める52を除いて内側を肥厚させている。器高は2.3cmを測る。

SD46 8世紀頃の須恵器広口壺の体部以下の破片(53)と11世紀頃の土師器甕(54)の口縁部以上の破片が出土している。54は口径18.0cmを測る。

土壇

SK35 土壇内で一括して出土した。図示し得たのは土師器(55～77)、須恵器(78・79)であった。いずれも9世紀後半頃のものと思われる。55～59は平らな底部をもち、体部から口縁部にかけて大きく外反する。端部は内側に肥厚させる。底部外端から外下方に脚台状のものがのびる。調整は内面端部付近に斜め方向の放射状暗文を施し、他はヨコナデである。口径は26.0cm～29.0cm、器高は14.1cm以上を測る。鉢状の形態を呈しているが詳細は不明である。60・61は甕である。60は口縁部のみで口径20.0cmを測る。61は体部下半を欠失しているもの



第4図 石鏃・土甕

の、口径14.4cm、器高7.6cm以上を測る。61は内彎する体部から口縁部が外反してのびる。端部は内側に肥厚させる。碗(62・63)は平らな底部の外端に断面台形の高台が貼り付く。口縁部はまっすぐ外方へ開き、端部は丸く収める。63は全面ヨコナデ調整を施し、口径18.2cm、器高5.6cmを測る。64・65は高坏である。64は坏部のみで、外反気味にのびる平らな皿状を呈し、端部を内に肥厚させる。外面はヨコナデ、内面は摩滅が著しく不明である。口径26.0cmを

測る。65は脚柱部のみで、断面八角形を呈する。環(66~71)は平らな底部からやや内彎する口縁部をもち、端部は丸く収める。外底面を除いてナデ調整が施される。口径は12.5cm~16.8cm、器高は3.4cm~4.4cmを測る。皿(72~77)は、丸底のもの(72)、平底のもの(73・74・77)、上げ底のもの(75・76)に分けられる。72は口縁部がそのまま内彎気味にのび、端部を丸く収める。内面端部直下に沈線が1条巡る。外面に横位のヘラミガキが施される。口径21.0cm、器高2.2cm以上を測る。73・77は口縁部が内彎するもので、73は端部を内に肥厚させる。74は口縁部がまっすぐにのびるもので端部は丸く収める。口径13.8cm~18.6cm、器高2.0cm~2.7cmを測る。調整はすべてナデである。75・76は口縁部上半が外反し、端部は丸く収める。調整はナデが施される。口径15.2cm~16.0cm、器高2.2cm~2.3cmを測る。78は坏蓋である。偏平な擬宝珠形をつまみをもち、天井部から口縁部にかけて内彎気味にのびる。端部でZ字状に屈曲し、先端は丸く垂下する。全面ナデ調整が施される。口径16.2cm、器高2.9cmを測る。79は短頸壺の上半部の破片である。丸味のある体部から短かい口縁部が垂直に立ち上がる。全面ナデ調整が施されている。口径8.8cmを測る。

SK36 9世紀末~10世紀初頭の上師器が出土した。80・81は坏で、ともに上げ底気味の底部から80はまっすぐに、81は内彎気味に口縁部がのびる。底面を除いてナデ調整が施される。80は口径13.4cm、器高3.9cm、81は口径12.8cm、器高3.4cmを測る。82は碗で、平らな底部の端に断面台形の高台が付けられる。高台径は10.6cmを測る。

SK40 6世紀前半頃の須恵器坏蓋(83)が1点出土している。ヘラケズリの施される天井部から境をやや不明瞭にしてのびる口縁部の端は内傾する平面をもつ。口径12.6cmを測る。

SK41 9世紀代の須恵器坏蓋(84)が1点出土している。平らな天井部からZ字状に口縁部が屈曲する。端部は垂下し丸く収める。内外面ともにナデ調整が行われる。口径15.4cmを測る。

包含層

85は須恵器坏蓋である。天井部外面の4分の3以上にヘラケズリを施し、端部に内傾する凹面をもつもので、6世紀前半頃のものである。口径11.6cm、器高4.9cmを測る。

86は須恵器坏身である。外底面の4分の3以上にヘラケズリが施されるもので、6世紀前半頃のものであろうか。口径10.6cm、器高5.3cmを測る。

87は京焼風陶磁器の碗である。黄褐色の釉が全面に施されている。口径8.6cm、器高7.3cmを測り、17世紀末~18世紀初頭頃のものであろう。

2. その他

石鏃・敲石・土錘が出土している。

88は平基無茎石鏃である。平面は二等辺三角形を呈し、断面はレンズ状に形成される。先端を少し欠くものの長さ3.0cm、幅は基底部分が1.4cm、重量は1.5gを測る。石質はサヌカイトと思われる。EIV地区SD31出土。

89は敲石である。平面楕円形を呈する。平面にアバタ状の敲打痕を有し、両短側辺それぞれに摩擦の痕跡と敲打による凹みを残す。長辺8.7cm、短辺7.5cm、厚さ6.4cm、重量は582.4gを測る。花崗岩質のものである。D地区SD4-3出土。

90~96は土鏃である。90・91はC類の球形を呈するもので、90はやや偏平、91は孔周辺部が片面は尖り、片面は凹むタマネギ状のものである。90は孔の両側辺、91は孔の尖らせた周辺に指圧痕がみられる。90は黒色を呈し、直径3.1cm、孔径0.8cm、重さ24.0g、91は灰褐色を呈し、直径2.7cm、孔径0.7cm、重さ10.0gを測る。92は

B類で胴振り円筒形を呈する。片方の端を欠失し、他端は一部分が欠失する。全体に摩滅を受けており、明黄褐色を呈する。長さ4.0cm、最大幅1.8cm、孔径0.9cm、重さは7.5gを測る。93～96はいずれも胴振り円筒形を呈する同形のもので、いずれも片端もしくは両端を欠失する。93は暗灰褐色、他は淡褐色を呈する。長さ2.6cm～3.0cm、最大幅0.9cm～1.1cm、孔径0.3cm～0.4cm、重さ1.5g～2.1gを測る。

3. 小 結

御倉遺跡では、弥生時代後期～江戸時代中期の遺物が出土した。

D地区では弥生時代後期～内式併行期と平安時代の遺物が出土している。遺物の大半はSD4からのものであり、3時期に分類されたことによりこの溝と方形周溝墓との関係が注日される。方形周溝墓の土器では、33が供献土器の可能性が考えられる状態で出土している。SB1の上師皿(1)は柱穴の掘形出土、SD3の土器(3～5)は上層より出土と、いずれもその遺構を明確にし難い状況での出土である。ただ、図示し得なかったが、SD3の最下層底面直上より時期不明の土師器小片が1点見つかった。

E地区は、最も土器の出土量が少なかった。SK21(弥生時代後期)、SD28(6世紀後半)、SD37(弥生時代後期)の3遺構からのみ復数の実測図を示し得た。遺物の時期は弥生時代後期～平安時代まで途切れることなく見られる。

G地区は9世紀中頃～10世紀代の遺物が出土している。SK35からは9世紀後半頃の土師器・須恵器が多量に出土した。当地区で図示した土器は、この土壌からのものが大半を占める。土器の出土状況は7竈内に密に堆積していた。一時期に大量投棄されたものであろう。また、55～58は鉢形の器形を呈すると考えたが、全容は不明と言わざるを得ない。

V. まとめ

検出された掘立柱建物には5棟である。SB2～4はEⅡ地区で近接して発見されている。すべて平安時代の遺物を柱穴より出土しているが、いずれも小片であるためSB1を除いて明確な時期は決定し難い。SB1は唯一の竈柱建物であるが、西隣の草津市教育委員会の調査においては、同方位の建物は検出されていない^⑧。SB4はSB1に近い方位を示しているが、北川を挟んで南に位置しているため関連性は不明である。また、SB2・SB3も同方位であるが、接近して検出されたため、同時期の存在は不可能である。

D地区においては、SB1と同時期と考えられるSD10、SD3が10世紀代の遺物を出土している。SD10はSB1の東に位置し、東柱列に沿って同方位に流れる形状を呈する。SD3とは重複関係があり、SD10が新しい。SD3は3基の方形周溝墓と溝の一部分を共有する形状を呈する。この溝は3層に分けられ、最上層より3～5の土器類が出土した。最下層から土師器の小片が1点出土したのみであったため、溝の掘られた時期は明確ではない。しかし、方形周溝墓のコーナーを狙ったように掘り進められていることから、溝掘削時において、方形周溝墓は何等かの形で意識されていたと考えざるを得ない。

方形周溝墓は5基検出された。SD2が同方向を示すため、周溝北辺の残欠であると仮定するならば、6基以上の存在が推定される。これらは同時期の溝SD4を境に、東西に分割される。東群はSX1とSD2であるが、こちらについては遺物の出土も見られず、不明な点が多い。西群は4基が規則性を持って築造されている。SX2とSX5、SX3とSX4は東西の溝が直線上に並び、同方位を示している。いずれも周溝部分の深さが10cm

～20cmと造存度が低く、主体部等の施設は何等発見されなかった。

S D15・16はともに中世の遺物を出土する溝で、同方位に流れる形状を呈している。これらはS D20・30・31・32・36等の溝と同方位であり、栗太郎の条里方位に近い数値を示している。現地形からは、S D15の西に走るコンクリート用水路とはほぼ同じ方向である。条里地割は当遺跡付近で乱れ始めており、これらの溝のいずれかが原設条里として復元される可能性はあるが、現地点では明確なことはわからない。

S D26・28はともに6世紀～7世紀頃の土器が出土している。S D28の東辺がやや不明瞭であるが、両溝はほぼ直交すると考えられる。両溝の交差する所までの最大長は6m～7mを測り、古墳の周濠の残欠の可能性がある。

S D40は大きな半円形を呈する。円形と仮定した場合の直径は16.1mを測る。溝に囲まれた内側は高さ50cm位の合状を呈し、当初古墳かと予想されたが、溝埋土中より9世紀末～10世紀初頭の土器が出土したため、古墳ではないと想定される。

御合遺跡周辺の地形の乱れについては、第1章で述べたように、北川の氾濫が原因であろう。では、今回の発掘調査をもとに、御合遺跡周辺の古地形復元を試みる。

まず、D地区南辺とG地区北半に旧河道が検出されている。F地区全域とB地区西半が湿地状を呈している。また、津市教育委員会による昭和60～62年度の発掘調査では、調査地区内に旧河道や湿地状を呈する区域が認められている⁹⁹。これらの調査地区内の旧河道や湿地等を現在の地形図に当てはめてみると、現在の畦畔と一致した形で現われており、現地形での不自然な畦畔の彎曲は、これに起因するものであると思われる。地形の乱れは、子守神社から北川の南に併行する水路にかけて特に大きく見られる。この範囲内が北川の氾濫を受けた地域であろう。西に位置する北宮遺跡で検出された旧河道は、古墳時代中～後期と平安時代末～鎌倉時代に流れていたものと推定されている。当遺跡の旧河道は、明確に時期を決定する遺物の出土を見なかったため不明である。しかし、D地区やF地区で10世紀頃の遺構を切り込んで流れていたことより、少なくとも10世紀以降にこの場所に流路を変更したことは明らかである。その前後の時期にも、度々流路を変更したであろうことは想像に難くない。また、今回検出された遺構も、そうした流域内の微高地上に営まれていたものと言える。(三宅 弘)

[注]

- ① 金田章裕 第5章「守護支配下の草津」（『草津市史』第1巻 草津市役所 昭和56年）
- ② （『近江栗太郎志』巻五 滋賀県栗太郎役所 大正15年）514 ページ。
- ③ ②に同じ。
- ④ 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会（『草津川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報一御合・北萱地区一』、昭和61年）
滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会（『草津川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報二御合・北萱地区一』、昭和62年）
- ⑤ 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会（『草津川橋梁部埋蔵文化財試掘調査概要報告書』 昭和60年）
滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会（『湖岸堤矢橋工区埋蔵文化財試掘調査概要報告書』 昭和61年）
滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会（『湖岸堤管理用道路（南山出工区）建設に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書・草津市南山田所在一』 昭和60年）
- ⑥ 造満 豊「『邸家』の機書土器」（『滋賀文化財だより』No83（財）滋賀県文化財保護協会 昭和59年）

- ⑦ 小宮敏幸「第五章 御倉遺跡発掘調査概要報告」（『草津川改修関連遺跡発掘調査概要報告書』Ⅰ 草津市文化財調査報告11 草津市教育委員会 昭和61年）
- ⑧ 藤原 則「御倉遺跡発掘調査概要」（『草津の古代を語る』 昭和61年度草津市遺跡発掘調査報告会 草津市教育委員会 昭和62年）
- ⑨ ⑥⑦⑧に同じ。
- ⑩ 大橋信弥「矢橋湖底遺跡第2次調査」（『びわ湖と遺産文化財』 水資源開発公社琵琶湖開発事業建設部 昭和59年）
- ⑪ 『昭和60年度滋賀県遺跡地図』（滋賀県教育委員会 昭和61年）
- ⑫ ⑩によれば、西から北宮遺跡、御倉遺跡、横遺跡、谷遺跡、中畑遺跡が確認されている。
- ⑬ ④に同じ。
- ⑭ ⑦に同じ。
- ⑮ ⑧に同じ。
- ⑯ 草津市教育委員会の昭和62年の調査結果による。
- ⑰ 昭和62年度に発掘調査が行われた。
- ⑱ ④昭和62年に分類される。
- ⑲ 谷口智樹「御倉遺跡発掘調査概要」（滋賀県埋蔵文化センター、スライド会資料 昭和63年）
- ⑳ ⑦⑧⑨に同じ。

第2章 襖 遺 跡

1. はじめに

当発掘調査は草津川河川改修事業にかかる側溝建設工事に伴う事前調査である。調査対象地は、事前に草津市教育委員会によって遺跡範囲確認調査が行われ、遺構・遺物の確認された草津市御倉町小字池ノ内の工事杭番号No19+5からNo20+10までの右岸側、長さ約100m、幅約1.6mの約160㎡である。当地は草津市西部に広がる栗太郎条里旅行範囲内に位置するが、近くを流れる伯母川や北川などの氾濫によるためか、畦畔に乱れが認められる。さらに、湿地や竹藪など水田として利用されていないところもある。

横遺跡は草津川河川改修事業が計画された時に、草津市教育委員会により分布調査が実施され確認された遺跡の一つで、古墳時代から平安時代にいたる集落跡と推定されている(第1章第1図)。今回の調査はその東端部にあたる。横遺跡は昭和59年度に遺跡の中央部分を近江大橋取付道路橋梁工事に先立ち、草津市教育委員会により調査が行われ、溝、土壇や栗太郎条里と同方位をもつ近世の水田畦畔などと、弥生土器、磨製石鏡、須恵器、瓦質土器などが検出されている。

2. 調査概要

今回の調査は昭和61年11月18日に実施した。調査は重機により上流から下流にむかって掘削を始め、耕作土および床土を除去した。その結果、No20からNo19+30付近までの水田下35から50cmの褐色系粘土層面で遺構を確認した。それより下流側は灰色粘土層となり、遺構、遺物は検出されない。

検出された遺構は柱穴約20個と溝7条等である。柱穴はNo19+75からNo20付近にかけて散発的に認められた。柱穴掘形は大きいもので直径約0.7m、小さいもので直径約0.3mの平面円形を呈し、柱痕を残すものもある。

溝は大・小の幅をもつものに分けられる。大きいSD2、7は幅約1.5mあり、深さは約0.3mで底部は平坦になる。細いSD1、4～6は幅0.3～0.5mで断面U字形を呈し、深さは約0.2mである。溝の方向はSD1、2はN27°Wを示し、SD1は北西側へゆるくカーブする。SD3は西側へゆるく落込み、南西方向へびる細い溝となり、東側へ大きく開く。SD4はN4°E、SD5はN2°Eを示し、南北方向に近い。SD6はSD7を切り込むものでN16°Wである。SD7はN34°Eを示し、栗太郎条里の方位N33°Eに近い値である。

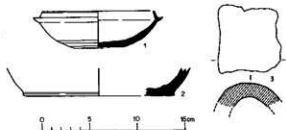
出土遺物は須恵器、土師器、磁器、フイゴウの羽口など全体で約80点出土した。検出遺構全般を通して、時期を明らかにするような遺物の伴出は少なく、大部分は遺構面直上からの出土である。1は7世紀前後の須恵器坏身で、底部にヘラ削りを施す。2は須恵器甕の底部で、平安時代に比定される。3の羽口は先端部に近い部分で、復原すると直径約8cmの円筒形になる。器壁厚は約1.5cmである。

3. まとめ

今回の調査では各遺構の時期を明らかにすることはできなかったが、出土遺物から古墳時代後期にはこの周辺にも湿地帯をさけて人々が居住していたと推定される。また、出土遺物の中で最も量の多い平安時代の遺物は、当地に平安時代の集落が存在したことを示唆するものであり、柱穴はこの時期に想定される。柱穴はすべて南北にのびるSD4から東側で検出されており、SD4は集落を区画する溝の可能性をもつ。なお、栗太郎条里とはほぼ同方位をもつSD7は、条里制地割と関係すると思われるが、柱穴より新しくSD6より先行するもの、どこまで遡る時期か明らかではない。

ともあれ、今回の調査は広範囲に拡がりをもつ横遺跡の一部分の発掘調査であったが、今後、当地区の調査を行ううえで、貴重な資料を得ることができたといえる。

(葛野泰樹)



第5図 横遺跡出土遺物実測図



D地区調査前風景（東より）



G地区調査前風景（西より）



D地区全景（東より）



D地区SB1検出状況（東より）



D地区SX 1検出状況（東より）



D地区SX 2検出状況（南より）



D地区S X 4 検出状況 (南より)



D地区S X 5 検出状況 (南より)



E I 地区全景 (東より)



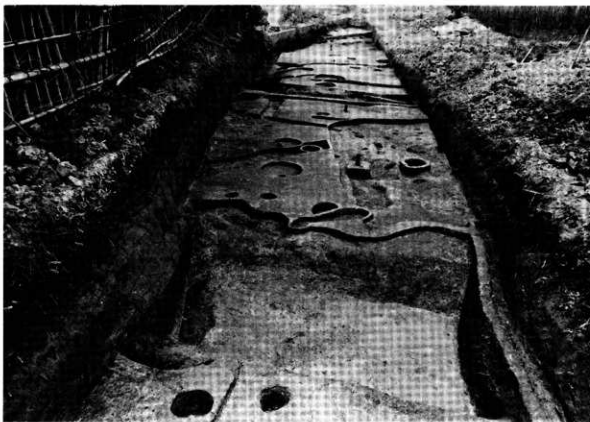
E II 地区畦と溝断面



51 御倉区全景 (西より)



52 御倉区全景 (西より)



E IV地区全景 (東より)



E V地区全景 (東より)



F地区全景（東より）



G地区全景（西より）



D地区S X 3土器出土状況



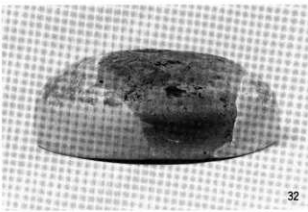
E I地区S K 10土器出土状況



6～28 S D 4 出土土器



27



32



33



34



35

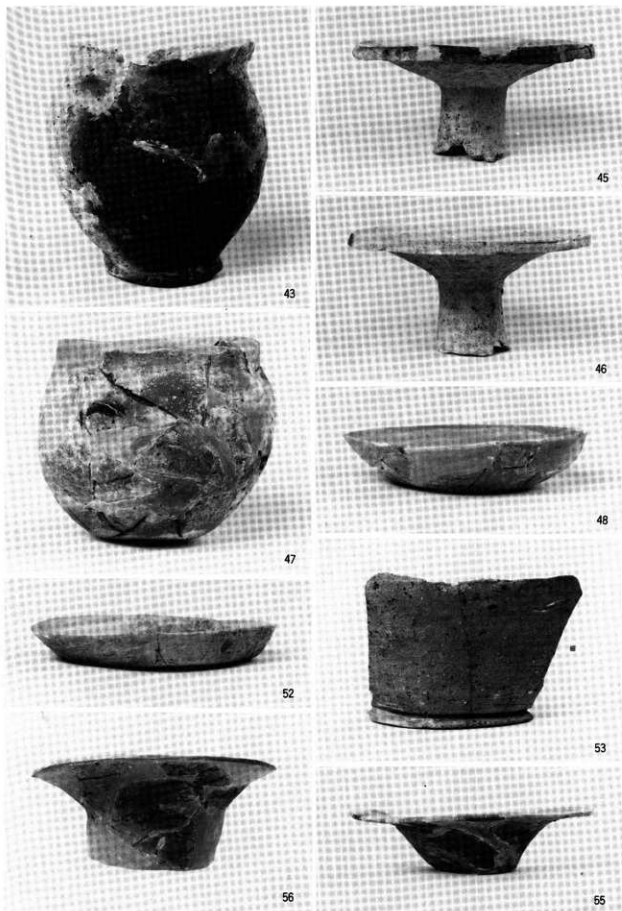


39

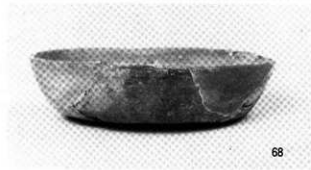


40

27S D 4 出土土器 32S X 2 出土土器 33S X 3 出土土器 34S X 4 出土土器
35S K 10 出土土器 39E III 包含層出土土器 40S D 28 出土土器



43~46S D 37出土土器 47・48S D 38出土土器 52S D 40出土土器 53S D 46出土土器
55・56S K 35出土土器

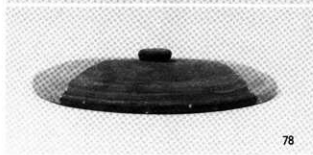




71



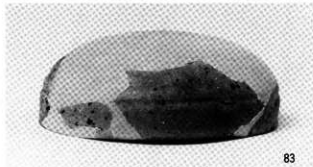
75



78



80



83



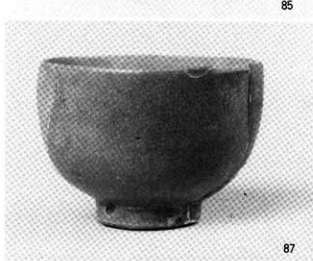
81



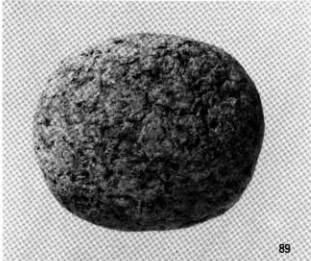
85



86

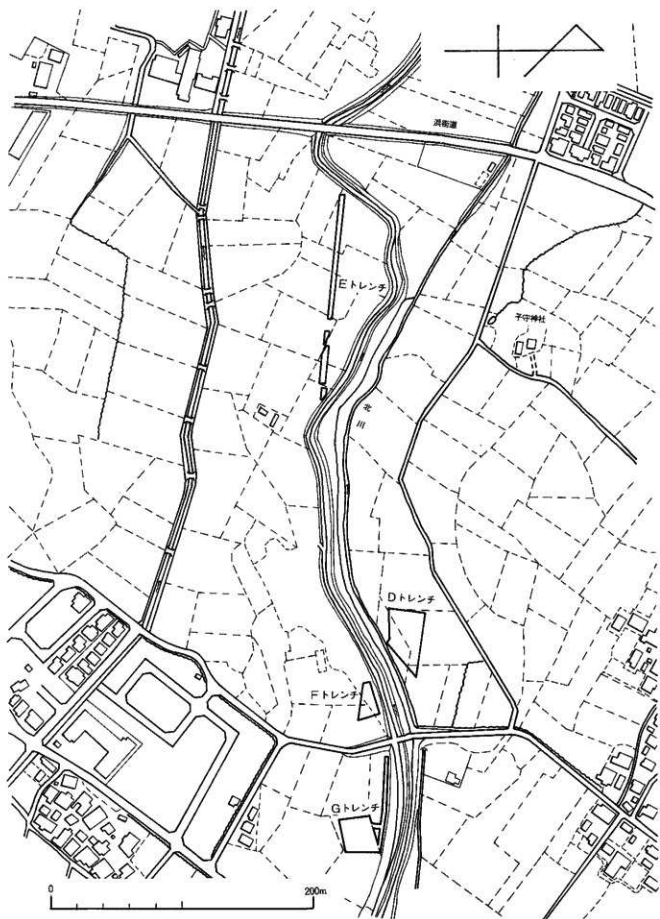


87

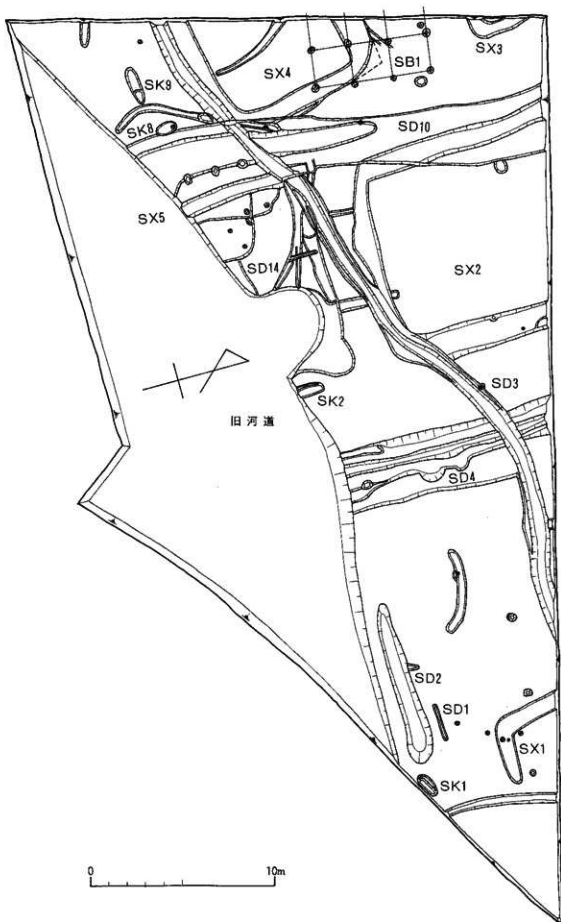


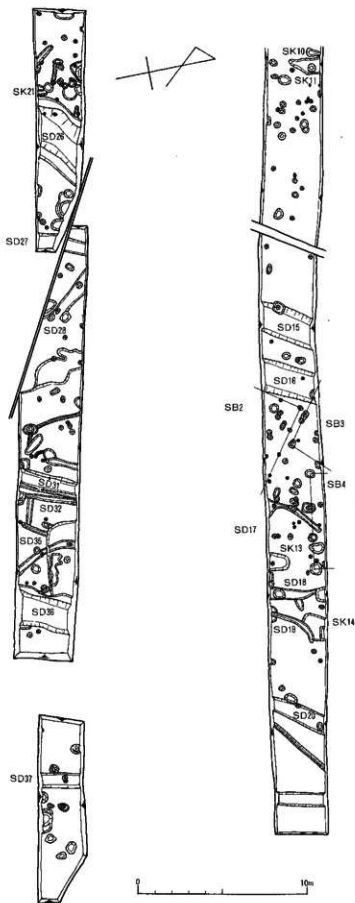
89

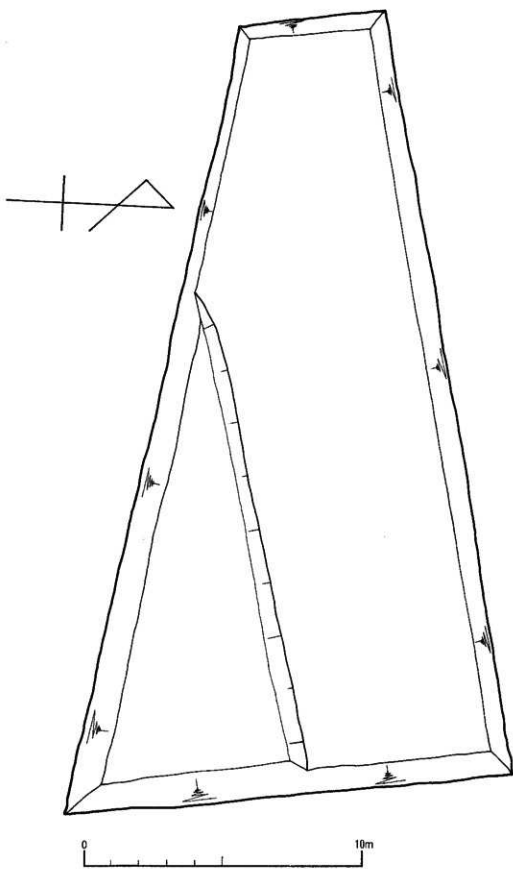
71~78S K 35出土土器 80・81S K 36出土土器 83S K 40出土土器 85~87G 包含層 出土土器
89S D 4 出土土器

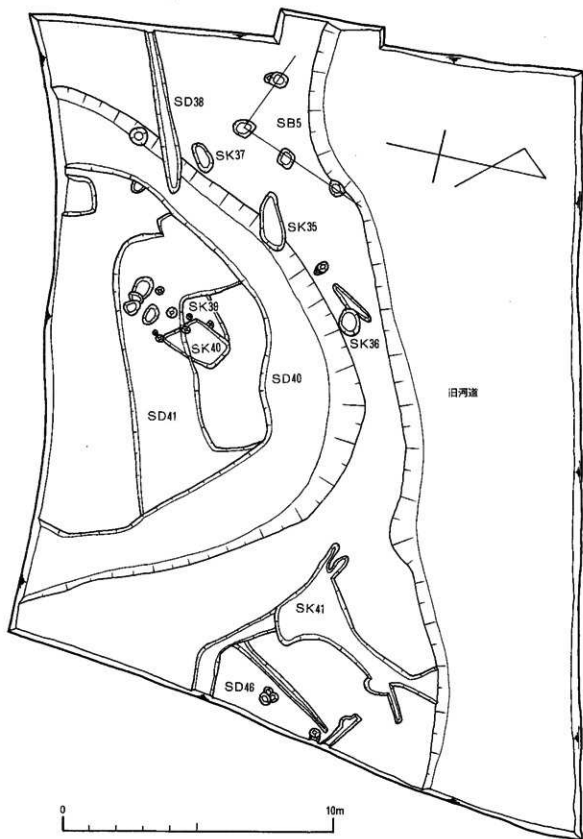


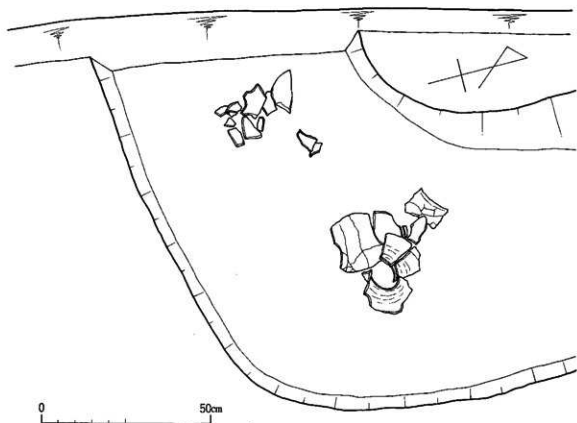
図版一六 御倉遺跡D地区遺構実測図



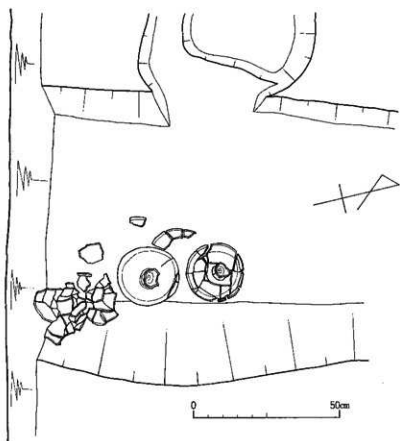




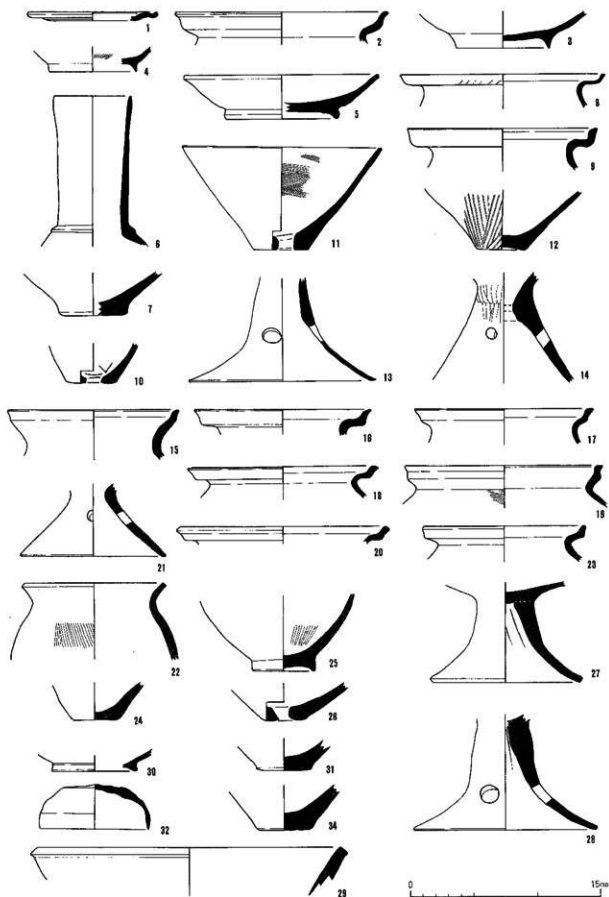




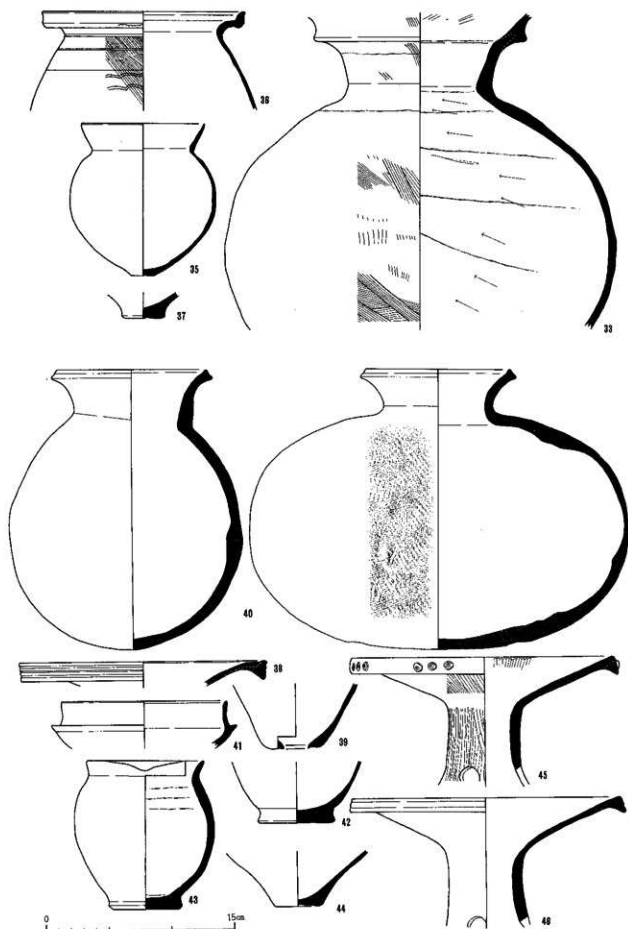
D地区 SX 3 土器出土狀況圖



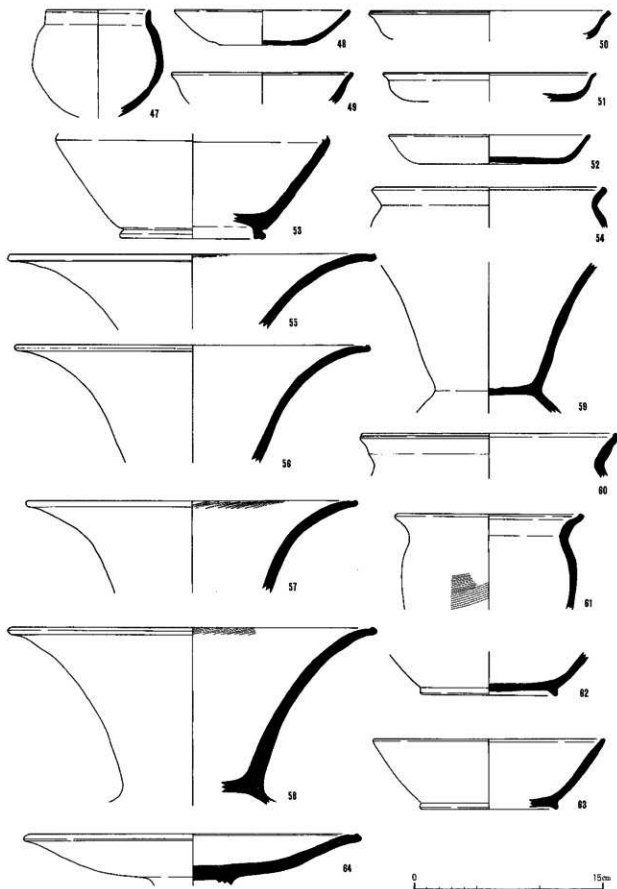
E V地区 SD 37 土器出土狀況圖



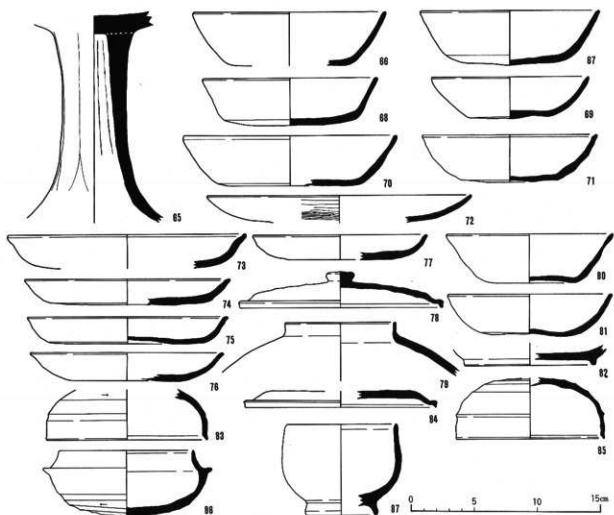
Dトレンチ出土土器実測図 1SB1 2SD1 3~5SD3 6~29SD4
30SD10 31・32SX2 34SX4



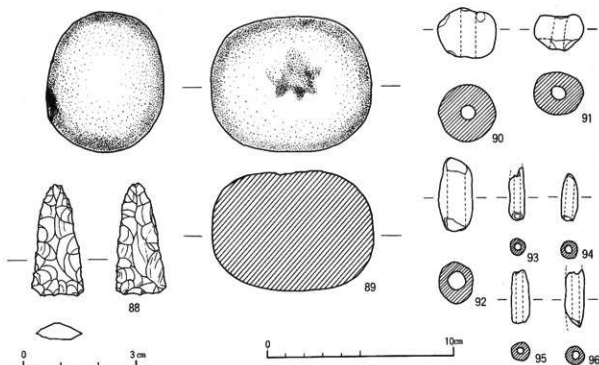
E トレンチ出土土器実測図 33S X 3 35S K10 36S D27 37・38S K21
 39包含層 40・41S D28 42~46S D37



G トレンチ出土土器実測図 47・48S D 38 49~52S D 40 53・54S D 46 55~64S K 35



G トレンチ出土土器実測図 65~79S K 35 80~82S K 36 83S K 40 84S K 41 85~87包含層



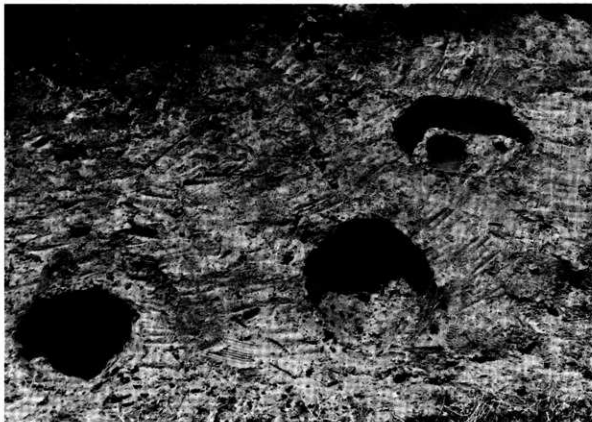
石鏃、土鏃実測図 88S D 31 89・90・92S D 4 91S D 28 93~95S K 10 96S D 15



発掘調査風景



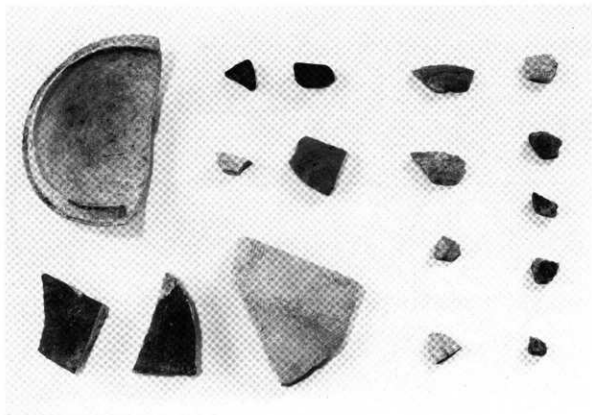
No.19+60~No.20トレンチ (西より)



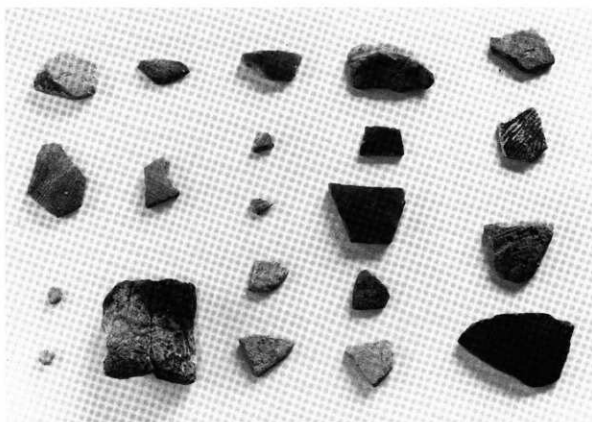
柱穴検出状況No.19+90付近



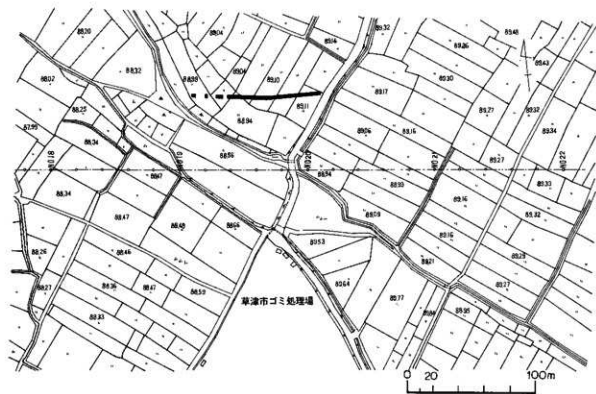
SD 5~7 検出状況 (南より)



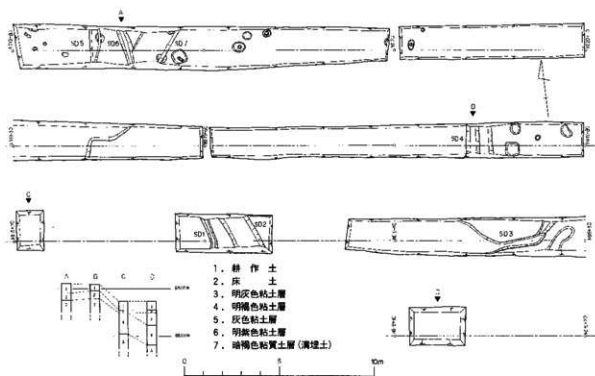
出土遺物



出土遺物



横遺跡調査地周辺地形図



横遺跡遺構実測図および土層柱状図

昭和63年3月

草津川改修事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報3

— 御倉・北畠地区 —

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財
保護課

大津市京町四丁目1-1

電話 0775-24-1121

財滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大坂町1732-2

電話 0775-48-9781

印刷所 富士出版印刷株式会社
大津市礼の辻4-20